

## 大人とは

そもそも大人とは、社会の成員となり、社会のもつ規範を自己のうちに採り入れ、社会を維持していくことに貢献する人のことである。その大人像は時代や地域、各民族が固有に持っている〈文化〉に基づいて規定される。

日本人の大人像は「一人前」という言葉で言い表されてきた。一人前とは、「カセギ」と「ツトメ」ができるようになることである。「カセギ」とは、平均的な労働量をこなす能力、即ち“労働能力”を身につけ、生活の糧を得ることである。かつては、男は六畝の田起こしや米一表の運搬ができることなどといった肉体の成長であったが、今日では「読み・書き・算盤」や最低限のパソコン操作といった社会生活を行う上での能力のことである。

「ツトメ」は三つある。一つは、子供を産み育てる能力（生殖能力）に基づいて子孫を残すことである。この場合、単に子供を作るということのみならず、親になるという自覚を必要とすることは言うまでもない。二つ目は、伝統・文化を伝承する能力（伝承能力）に基づいて、次の世代に社会に生きる知恵を教えることである。挨拶の仕方を教えたり、危険なことを注意したりして社会生活上のケジメを教え、次の世代が社会生活を円滑に行えるように促すことである。

三つ目は、社会生活を円滑に行い、家族と共同体を維持することである。これには社交能力を必要とする。社交能力を涵養するには、第一に自分の属する共同体への帰属意識をもつことである。それは「公」の意識をもつことと言い換えることができるが、このことは反面において、自分の居場所があるという実感を持つことに繋がる。

帰属意識と居場所確認を実感することは、〈お蔭さま〉と〈お互い様〉という精神に収斂する。お蔭さまという気持ちは、自分の今日在るは父母・祖先や仲間をはじめとした周囲に人のお蔭であることを確認し、感謝の念を持つことから生まれる。自分を超越る存在一神仏やご先祖様一を前提とした人間観・世界観をもつことであり、親への感謝が基本となる。

日本人は、「どんなに力んでも、宇宙（自然）の営みに逆らうことは出来ない」との世界観をもっており、それが、「自然は大変尊敬すべき人生の手本」「自然の法則に逆らうことは人生を破滅させる」という生活原理・教育原理を生み出した。さらに、人の魂はあの世からこの世に来て、またあの世に戻るという霊魂観があり、子孫を祝福してくれる祖先を大切に扱う祖先崇拜の観念が加わっていた。これらの観念が、無意識のうちに“お蔭さま”という気持ちを醸成していたのである。

「お互いさま」という気持ちは、自分の厭なことを他人にしないとか、お互いに助け合うという行動を生み出す。このためには、“たしなみ”を身につけることが要求され、それが礼儀作法などの形式（対人関係の潤滑油としての形式）を生み出した。なお、“たしなみ”とは、「察する」能力と「分相応」の振舞いによって現れて来るものである。

お蔭さまとお互い様の気持ちは持つことは、謙虚さや義務感を醸成するとともに、人間関係の潤滑油として機能する。したがって、社交能力涵養の第一歩となるのである。

社交能力を涵養する二つ目は、ツトメの自覚をもつことである。それは、「～として」という役割を演じることによって行われ、制度や秩序を自らが体現することに繋がる。人の社会は具体的な関係性によって成立しており、それは役割という形で現われている。親として、子として、部下として、上司として、近所の人として等々、社会生活の中ではおのずから役割が求められている。その役割を、求められるように、あるべきように演じていくことである。

社交能力を涵養する三つ目は、義務を果たす責任感である。孤独に耐える、さまざまな人との関係性を持つ、自己責任・自己判断をするといった、緊張度の高い生活を甘んじて受ける覚悟がなければならない。その覚悟が社交能力を高めるのである。しかし、人は緊張のみでは生きていけないから、弛緩やゆとりをもたらし遊び心を身につけておかねばならない。遊び心とは、換言すれば、自分の中の<悪>と折り合いをつけながら過ごすことが出来る心でもある。社交能力を高めるにはストレスと向き合わねばならないが、ストレスと戯れる心の余裕を持ちたいものである。

社交能力は一朝一夕に身につくものではない。社会は常に変化するものであり、その変化に従って様々な経験を経ながら徐々に身につくものである。正直に生きることが何よりも大切なことであり、それを積み重ねることによって人格が養成される—それが「大人の完成」へと繋がっていくのである。